

©HLF3 Secretariat



ガーナ・アクラ

開発援助は量から 質が問われる段階に

世界銀行シニアエコノミスト 石原陽一郎

WATCH FIRE

【開発途上国の明日】

34

OECDによると、2009年の世界のODAは約1200億ドルに達した。開発援助は巨額だが、00年に国連で採択された、15年のミレニアム開発目標(MDGs)の達成には程遠い。今や開発援助を効率的に行うための「援助の効率性」が、現場のみならず、サミットなど政治の場でも主要議題の一つだ。

非効率な援助をもたらすものとして、援助供与側の協調不足による援助の重複や、受け入れ側である開発途上国の不明確な開発目標などが挙げられる。援助の効率性自体は、新しいテーマではないが、受け入れ側・供与側双方に改革を求めている。

03年以降、閣僚級のハイレベル会合が定期的に開催され、05年のパリ会議では、10年を目標とする「援助効率性に関わるパリ宣言」を採択。08年の「アクラ行動計画」(写真)では、パリ宣言の中間評価に加え、「開発途上国の自主性の尊重」「開発に関するより効率的なパートナーシップの構築」「開発効果の重視」など、パリ宣言をより明確化した。

中間評価では、一層の努力の必要性が記された。開発援助はそれ自体が目的でなく、途上国の開発に寄与することが目的。効率性の向上がどう効果に結び付くかの議論や検証も必要だ。11年に韓国・ソウルで開催される第4回ハイレベル会合ではより踏み込んだ議論が行われる。

【ここは現実、仮想、日常などさまざまな空間を切り取り、お届けするページです】